みやぎの 林業だより

特集　木漏れ日トーク「森林、林業・木材産業×SDGs」

令和３年度の水産林業行政は「環境と調和した持続可能な水産業・林業」を目指し、「SDGsの推進」を踏まえた取組を行うこととしています。

そこで本誌では、今年度３回にわたり、持続可能な森林、林業・木材産業を目指す取組を紹介する計画です。

第１回目となる本号では「森林、林業・木材産業×SDGs」と題し、県内で積極的にSDGsの推進に取り組んでいる３名の方に、それぞれの取組や、SDGsに取り組む際のヒントとなるお話をお聞きしました。

(一社) SDGsとうほく　紅邑　晶子氏　／　登米町森林組合　竹中　雅治氏　／　株式会社佐久　佐藤　太一氏

表紙写真

(左上)
SDGsの17の目標
(左下)
FSC認証材を使用したSDGsバッジ
(下中央)
広葉樹を使用した学習机
(右)
登米市の森林セラピー基地

令和３年８月25日
発　　行

224号

目次

特　集　**座談会「森林、林業・木材産業×SDGs」** …… 1～4
話　題　**制度見直し**
◎森林整備関係補助事業の体系見直しについて …… 5
各種取組
◎みやぎ森林・林業未来創造機構
笑顔あふれる森林・林業に向けスタートアップ …… 6
◎七ヶ宿町における木質バイオマス利用拡大に向けた取組 …… 7
◎ＣＬＴ等建築物の現場技術者養成研修の実施 …… 7
◎地域主導による海岸防災林維持管理体制の構築に向けて …… 8
◎ＮＰＯ団体との連携による松林再生への取組 …… 8
◎ＪＧＡＰ認証によるなめこ栽培 …… 9
◎海岸防災林のドローンを用いた生育調査と保育管理がスタート …… 9
◎令和３年度春の叙勲～林業振興の功績が実を結ぶ～ …… 10
◎企業等による森づくりパネル展開催 …… 10
◎令和3年度林業試験研究の概要 …… 11
市　況　◎木材市況の動向・特産市況の動向 …… 12

※みやぎの林業だよりバックナンバーはこちら↓
https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/ringyo-sk/ringyo-dayori.html

みやぎの木づかい運動　みんなで使おう みやぎの木　宮城県

―― 伐採の届け出・森林の新規所有の届け出は、市町村へ ――

木漏れ日トーク

座談会「森林、林業・木材産業×SDGs」

佐藤（さとう）　太一（たいいち）氏

＜プロフィール＞

南三陸町で代々続く（株）佐久で専務取締役を務める傍ら、南三陸森林管理協議会の中心人物として、平成27年に宮城県内初のFSC認証を取得。

林業を軸に、様々な取組にチャレンジされている。

（株）佐久　FaceBook
sakyuminamisanrikuで検索

紅邑（べにむら）　晶子（あきこ）氏

＜プロフィール＞

（一社）SDGsとうほくの代表理事であり、（一社）ふくしま連携復興センターの理事も務める。

これまで多くの街づくりに携わり、東日本大震災の被災者支援にも尽力されている。

（一社）SDGsとうほく　ＨＰ
https://www.sdgs-tohoku.jp/

竹中（たけなか）　雅治（まさはる）氏

＜プロフィール＞

登米町森林組合の参事であり、登米市森林管理協議会ＦＭ認証材流通事務局も務める。

森林セラピー基地の設置など様々な取組にチャレンジ。最近ではNHK朝の連続テレビ小説「おかえりモネ」の林業監修を担当されている。

登米町森林組合　ＨＰ
https://forest100.jp/

SDGsと森林

ＳＤＧｓとは、平成二十六年に国連で採択された「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals)」のことです。令和十二年までに持続可能でより良い世界を実現することを目指し、十七の目標と百六十九の指標が設定され、全ての国が目標達成のために行動することとされています。

近年、世界的に関心が高まっているＳＤＧｓですが、実は、森林、林業・木材産業もＳＤＧｓ達成に大きく関わっています。

森林の持つ多面的機能の発揮はもちろんのこと、森林を利用することもＳＤＧｓに貢献しており、そこから生み出される恵みを森林の整備・保全に還元させることで持続可能な大きな循環を作り出すことが重要です。

●SDGsを自分事と捉える

（事務局）ＳＤＧｓを意識していても、何となく漠然とした認識に止まってしまっている。

（紅邑）先日、佐沼高校で講義を行ったときは、ＳＤＧｓを他人事ではなく、自分事として捉えてもらうことを意識して話をした。

例えば、「おかえりモネ」を例に、海と山は繋がっていることを説明するなど、「自分の地域とＳＤＧｓは繋がっている」という意識を持ってもらうことが大切だと話した。

そんな前提で、森林、林業・木材産業がＳＤＧｓとどう繋がるのか考えたとき、まずは「陸の豊かさも守ろう」が挙げられるが、「海の豊かさを守ろう」や「気候変動に具体的な対策を」「住み続けられるまちづくりを」にも繋がるし、林業のＩＣＴ化は「産業と技術革新の基盤を作ろう」に、さらに、教育の場としても有効であると考えると「質の高い教育をみんなに」にも繋がる。

こんなふうに、身近なものを一つのアイコンだけではなく、様々なアイコンに繋げて考えてもらえれば良いと思う。

（佐藤）ＳＤＧｓはグローバルな視点

で整理されているため、使い方が分かりにくい部分もあるが、あまり構えずに、気楽に普段の生活の中での現状の整理に使いつつ、出来ることを見つけ出すツールとして使っていけばいいと思う。

(竹中)一人一人がＳＤＧｓを目指して課題を解決するというよりも、自身の日ごろの生活を今一度見直す「きっかけ」だと思ってもらえば良い。

その一方、産業界は、この課題を直視して取り組まなければならない。

(佐藤)私は林業経営者としてＳＤＧｓに取り組んでいるが、ＳＤＧｓの項目はＦＳＣ認証の規格とほとんど同じで、項目の順番もよく似ている。

座談会の様子（登米市森林公園内）

ＦＳＣ認証は持続可能な森林管理を目指し、きちんと管理された森林からの製品を目に見える形で消費者に届ける仕組であり、責任ある森林管理を初めて規格化したもの。

そのため、ＦＳＣ認証の基準をクリアすることは、ＳＤＧｓに立ち向かう事と、ほぼ同意義だと思って取り組んでいる。

それぞれの立場などでアプローチの仕方は違うが、こういった認証を使うことも一つの手段だと思う。

(紅邑)ＳＤＧｓの十七の目標と百六十九のターゲットの翻訳は読み取りにくいところもあるけれど、身近にある課題と読み替えて解釈しても構わないと思う。

例えば飢餓について、途上国の課題と思って関係ないと考えてしまうが、子ども食堂やフードバンクなどの取組があるように貧困問題は日本にもある。

このように、ＳＤＧｓの項目を読み替えないと、遠い国の他人事のままになってしまう。

(竹中)視点を変えてみれば、日本にも十七項目全てが当てはまると思っている。

私は「おかえりモネ」の中にも十七項目全て出てくると考えていて、例えば、学習机製作のため、高齢の木工界のレジェンドに仕事に戻ってもらったシーンがあるが、このことは高齢者のやりがいや働く場所の提供に繋がり、貧困や国の中での不平等解決にも繋がってくると思う。

(佐藤)どの項目も辿っていけば皆に当てはまり、「誰一人取り残さない」に対して、自分は当てはまらないと考えないことが大切。

そういったことも踏まえ、しっかりと取り組んでいることを知ってもらうためにも、ＦＳＣ認証を取得した。バックグラウンドまでＰＲして選んでもらわなければならない。

木一つ取っても、外材の中には児童労働や熱帯雨林の伐採などによって作られたものもあり、ぜひ消費者側も気を付けていただきたい。グリーンコンシューマーもＳＤＧｓに繋がる。

(紅邑)ＳＤＧｓについて聞いたことがあると回答した人は五割以上となっているが、特に子供たちは学ぶ機会が多く、親に比べて多くの子供が聞いたことがあると答える。

内容が分かると他人事ではなくなり、自分事となってくる。知ることで、直接森に関わらない方々であっても、日々の暮らしの中で、アクションしやすくなるのではないかと思う。

(佐藤)地元に根付いた一次産業がサスティナビリティを意識した取組を行い、教育サイドとしても、そういった事例を取り込んでいくことが大切。

(紅邑)震災がきっかけで先人の知恵が見直されたように、ＳＤＧｓは、もともとあったものを評価し直す手段になる。

日本人は自己肯定感が低い傾向にあるが、ＳＤＧｓを通して改めて自分の暮らしや仕事を見てみると、意外ときちんと実施できていることに気が付いたりする。

(佐藤)林家の多くは自分の山が一番だと思っていて、良い施業をしていると思っている。ただ、それがどう良いのか、客観的に見てどうか、というアウトプットの部分が足りていない。

そういう点では、ＳＤＧｓもＦＳＣ認証も、何が良いのかという定義を一から考えなくても既に整理されているものに当てはめるだけなので、とても楽に利用できると思う。

(紅邑)先に話したように、それぞれ

に合わせた読み替えをして、自分の今の位置を知る指標にしてもらえれば良い。

（佐藤）自分たちがＦＳＣ認証の取組を始めた時も、全然分からない中で、咀嚼しながら自分なりの言葉に置き換えていった。

これからの時代はこういったユニバーサルな基準を取り入れながら、ライフスタイルに落とし込んでいかなければならない。

●選ばれる木材を目指す

（紅邑）ところで、ウッドショックという言葉を聞いたが、これをブームで終わらせないためにはどうしたらいいのか。

（竹中）価格について言えば、昭和五十年代は丸太一立方メートル当たり三万円以上の値がついており、現在の価格が果たして高いのか、という疑問はある。

また、柱材となるＡ材ばかりが出荷されても意味はなく、大切なのは出荷のバランスだと思う。合板用のＢ材やＣ材も売れ、一本の木が全て無駄なく出荷できることが理想。

（佐藤）もう一点、ボトルネックは設備投資。一気に生産量を増やすには機械も増やさなければならないが、値上がりが一時的なものなのか見通しが立たない中、高い設備投資は難しい。

とにかく、林業経営者としては、再造林ができる値段を維持してもらいたいと思っている。

木の一番のメリットは再生可能であること。木は様々な材料にもエネルギーにもなり、かつ二酸化炭素を固定する素晴らしい素材だが、再生可能というところが抜けてしまうと価値は下がる。

植えて、再生させて、公益的機能も発揮させながら使う、それこそが木材のメリットで、持続可能な素材と言われる理由である。

（紅邑）ＳＤＧｓの視点から見ると、木材は一方向からではなく、様々な方向から捉えられるということがよく分かる。

（竹中）私は常日頃「選ばれる地域材」でなければならないと思っている。杉はよほどのブランドでない限り、大きく品質は変わらない。何をもって消費者が選んでくれるか、ＳＤＧｓやＦＳＣ認証が共通の言語となり、選択される一つの基準になって欲しいと思う。

例えば、合板はＦＳＣ認証材を使った製品は少ない。そんな中、石巻合板は会社レベルでＦＳＣ・ＣＯＣ認証を取得しており、昨今ようやくＦＳＣ認証材を使用した合板ができた。我々のＦＳＣ認証材は特定の枠をいただき、優先的に買ってもらえている。毎月買ってくれるところがあるということは非常に心強い。

合板が動けばＡ材も出せる、山は需給調整できないため、山の進度に合わせて確実に買ってくれるお客様がいることは、とても大きなこと。

（佐藤）ＦＳＣ認証は南三陸町が先に取得したが、南三陸だけでは合板の枠を取ることはできなかったと思う。登米市が一緒に取り組んでくれることになり、可能性が広がった。

ＦＳＣ認証は、取得したからと言って材の値段が上がるわけではないが、「優先的に選ばれる木材」にはなる。

もちろん、ＦＳＣ認証だけでなく、きちんと経営計画を立て、毎年の出荷量の見通しを出せるからこそ、信頼してもらえるという部分もある。そこにＦＳＣ認証やＳＤＧｓといったものが加わり、選ばれる木材になる。

（紅邑）日本もこの頃ようやくトレーサビリティが周知されてきたが、消費者は、きちんと生産のプロセスを想像して選ぶ目を持つことが大切。

今後、ＳＤＧｓを学んだ子供たちが大人になった時、しっかりとした目を持った消費者になるはず。大学や就職先も、ＳＤＧｓなどに積極的に取り組んでいることが、選択の理由の一つになってくる。

これから消費者の意識が変わっていく中で、企業も変わらざるを得ない。

大きな会社だから取り組めるものだと思われがちだが、小さい会社ほど頑張ってほしい。

自分の地域には一生懸命取り組んでいる会社があるという地元の誇りにもなるし、就職する時も、選択の理由になるはず。

（佐藤）自分たちも、ＳＤＧｓやＦＳＣ認証に真剣に取り組んできたから

FSC認証材を使用した製品

こそ、色々な場面に呼んでもらい、こういった繋がりも生まれている。

(紅邑)なかなか取組が進められない会社は、先駆者にノウハウを提供してもらったり、一つの企業だけではなく町全体で取り組むなど、点が面になって取り組んでいくことが必要。

こういった事が持続可能な企業であることに繋がっていく。

(竹中)林業はどうしてもそれぞれのテリトリーの中で仕事をしてしまう傾向にある。自分たちはここまで、と線を引くのではなく、これからの時代は、自分たちも最後まで関わって、みんなで一緒にやっていかなければならない。

●地域資源の発掘と活用

(事務局)こういった取組を他の自治体に広げていくためにはどうしたらいいか。

(佐藤)他の市町村も外から見たら良いところがたくさんある。

地域ごとのプレイヤーがSDGs目線で現状を把握しながら、どうクリアしていくか検討し、見つけた強みをどんどん自慢していけばいいと思う。

(紅邑)興味のある市町村に対して、南三陸町や登米市の取組事例を紹介したり、互いに交流してみても良いと思う。

また、農福連携と言うように、農業と福祉のような他の分野とコラボするなど、一見関係ないような分野でも繋がれば強みになる。各地域における地域資源の掘り起こしが重要。

(竹中)農福連携と言えば、もともとは森林セラピー基地も高齢の方の健康増進を目的として設置したものである。

初めは使われていない遊歩道を何とかしたいというところからスタートした。年に数回、地域の高齢の方々のサークルを招待し、健康づくりを進めようというもので、ラフターヨガもその時に考えたもの。

街づくりの中に森が入るということはなかなか難しいが、森林セラピー基地は観光や街づくりの中にも溶け込むことができたと思っている。

登米町森林組合として考えれば資源は少ないが、何もないからこそ、出来ることを考えながらやってきた。

これからFSC認証やSDGsの取組が広まっていく中にあっては、南三陸町と登米市が先行してスタートし、他の市町村等は入りやすくなったのではないかと思う。

(佐藤)FSC認証の取組が拡大するよう、どんどん参加してほしい。必要があればマニュアルも提供する。

(事務局)他の市町村でも、取り組みたいという声は出てきているが、なかなかうまく資源を活用できていない現状にある。

(竹中)FSC認証の取組は既存の組織の中でやろうとして上手くできないと考えている。

現在、市町村や県は、補助金を通して山を管理する形になっているが、それぞれが山への考えを持っている。登米市では、そういった点を生かせる組織にしていきたいということで、手続(管理)は市(FM認証管理事務局)、山の経営は森林組合(FM認証材流通事務局)というように、役割を分けた。これにより、市の方たちも一緒にやっているという意識を持ってもらっていると思う。

我々も決してうまくいっていることばかりではないが、ここまで取り組んできて良かったということは確実に言える。

(佐藤)FSC認証は取得することが目的ではなく、それをどう活用するかが重要であり、活用する意欲のある人が地域にいることも重要なポイント。

(紅邑)他の市町村にSDGsやFSC認証を進めるキーパーソンがいないとすれば、どうやって発掘するかが課題。担える人がいないのではなく、見つけていないだけの可能性もあるし、外から来た人の中にいるかもしれない。場合によっては人づくりも必要となる。

行政も含めて、タテをヨコの繋がりに変え、他の部門や市町村とも連携して取組を進めていくことで、SDGsの取組も広がり、持続可能な森林、林業・木材産業に繋がっていくのではないか。

登米市森林公園にて

(林業振興課)

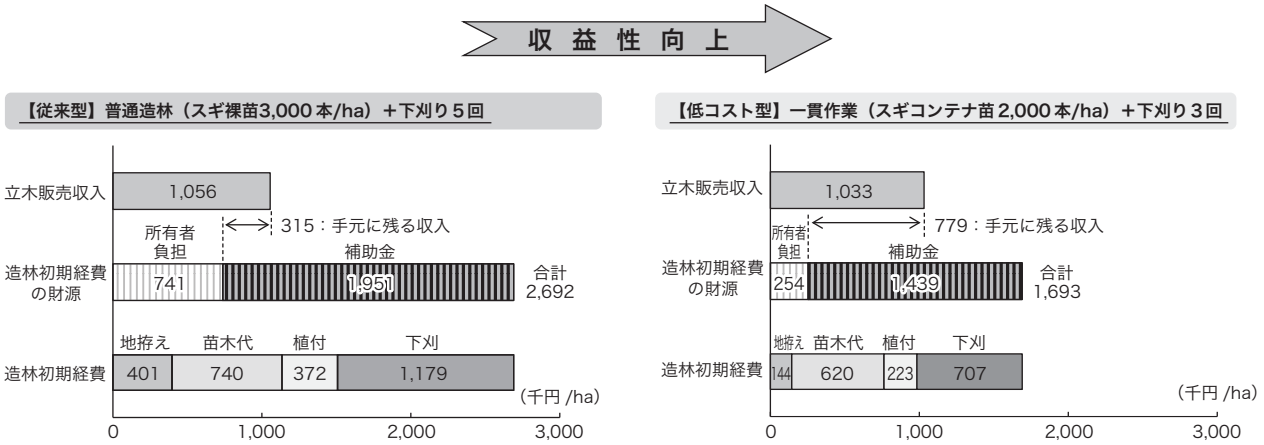
森林整備関係補助事業の体系見直しについて

低コスト造林モデルの検討

本県民有林の造林面積は、近年二〇〇㌶から三〇〇㌶程度で推移し、再造林率は三〇％程度にとどまっています。再造林が進まない要因として、主伐によって得られる収益に対し、再造林に要する費用が大きいことが挙げられるため、県では、林業の省力化・低コスト化に向けた施業体系の検討を行いました。

検討の結果、これまで県内で行われてきたヘクタール当たり三〇〇〇本植えを一貫作業による低密度植栽に改め、通常五回以上実施されていた下刈についても三回まで削減することで、造林初期経費は約二百六十九万円から約百六十九万円まで削減できる試算となりました。

なお、植栽本数の低密度化や、一貫作業により一年目の下刈を省略し、二・三・五年目の計三回に下刈回数を減じた場合においても、その後の生長や林分材積には影響しないことが、森林総合研究所などの研究で報告されています。



補助事業の体系見直し

県では、上記の低コスト再造林モデルを現場レベルで定着させるため、補助事業体系を次のとおり見直しました。

一　一貫作業による再造林の補助率をアップ（所有者負担が概ねゼロに！）

二　ヘクタール当たりの植栽密度の上限を二五〇〇本に引き下げ（令和四年度以降は二〇〇〇本まで下げる予定）

三　下刈の補助対象は原則三回、六年生まで

再造林を進める上でもうひとつ重要なのが、複数回の間伐を繰り返す現行の長伐期施業から、県内民有林資源の高齢級化を踏まえ、主伐再造林による若返りに移行していかなくてはならないという点です。

また、災害に強い作業道づくりや、流木対策等の観点も踏まえ、間伐等についても補助体系の見直しを行いました。

一　公共事業の間伐補助対象は六〇年生、非公共事業は七〇年生に引き下げ

二　県単事業による間伐単価を、保育ベースのものに一本化

三　玉切り、片付けまで実施した保育間伐の補助単価をアップ

四　作業道は横断排水溝や路面工の有無により段階的な補助単価を設定

林業の低コスト化に向けて

今回の見直しに関して頂いている意見で最も多いのが、下刈回数の削減に係るものです。今回の見直しは、「補助は絶対に三回まで」というものではなく、現場の状況に応じ、事前に必要性をお示しいただければ、四回目以降も補助対象とするなど、弾力的な運用としています。

重要なのは、「下刈なら必ず五回以上」という固定観念から脱却し、林業の省力化と低コスト化を進めていくのに何が必要で何が不要なのか、関係者の皆様と改めて一緒に考えていきたいという点にあります。

林業の収益性向上を図り、再造林に取り組んでいただける環境をつくるため、御理解と御協力をお願いします。

再造林推進ＨＰ
〈https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/sinrin/afforestation.html〉

（森林整備課）

〈みやぎ森林・林業未来創造機構〉笑顔あふれる森林・林業に向けスタートアップ

当機構は、若い世代が魅力に感じる森林・林業の創造を目指し、林業の就業環境向上と人材確保・育成の取組の推進母体・プラットフォームとして昨年十二月に設立されました（現在七一会員、業界・地域・研究・行政分野で構成）。年明けから活動を開始し、経営強化就業環境部会と研修事業部会において、機構の取組の方針となる「事業構想」の検討を進め、会員意見の聴取や幹事会の審議を経て、五月の総会で決定しました。

【事業構想の概要】

●ビジョン・私たちが目指す姿

課題解決に会員が連携・協働して知恵と力を出し合える機構の機能を活かし、次のような「笑顔があふれる森林・林業」の実現を目指します。

☆森林・林業が成長を続け美しく豊かな森林が維持され、森林所有者も林業従事者も消費者も市民も笑顔があふれている社会。

☆森林・林業への関心が高まり、若い世代の参入が進み、森林・林業の成長と地球環境の保全や地域社会の発展をけん引する一員として活躍を続けている社会。

☆安全性追求と生産性向上、事業量の安定確保が進められ、所得向上や労働安全衛生など、質の高い就業環境が整った林業。

●就業環境向上プロジェクト

林業の就業環境向上とそのための経営強化に関する重点課題を見える化し、会員で共有していくため、四つのプロジェクトを設定しました。カレッジによる人材育成や行政・各団体の施策と連動させながら、会員の参画と取組により推進します。

①林業担い手ＳＤＧｓ推進プロジェクト→事業体と行政等の協力による産業力・就業環境の向上

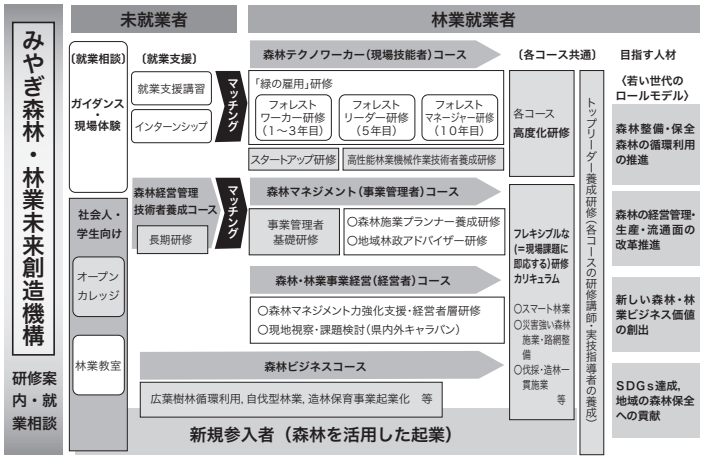
②林業イノベーションプロジェクト→快適な林業の実現（安全・効率化・省力化・軽労化）

③森林再生循環プロジェクト→新規ビジネスで森林環境を向上

④経営強化ビジネスモデル創出プロジェクト→以上のプロジェクトを推進するモデルの創出

●共に創り上げるみやぎ森林・林業未来創造カレッジ

多様なニーズに応えられるフレキシブルな研修体制の構築を基本にして、県、林業労働力確保支援センター、林業・木材製造業労働災害防止協会などの研修実施機関が連携し、右の体系図のとおり、学び始めから就業後のキャリアアップまで総合的な研修の場を提供します。



●推進体制・実施工程

会員の参画・連携・協働を軸に、アドバイザーや大学、企業等の協力を得ながら取組を推進します。また、機構事務局の林業技術総合センターでは、各地域の林業普及指導員をはじめ、普及・行政・研究の連携により効果の高いカレッジの運営やプロジェクトの推進に努めます。

実施工程については、「みやぎ森と緑の県民条例基本計画」の終期である二〇二七年までを第一期の計画期間として取組を進めます。カレッジは今年秋の部分開校、来年度の本格開校を予定しています。

【令和三年度事業計画】

部会を中心にプロジェクトの推進やカレッジの開校に向け検討を進めるほか、次の企画によりカレッジのＰＲやプロジェクトへの参加、森林・林業関係者や一般の方々の交流を図ります。

①オープンカレッジ（七月開催、プロジェクトシンポジウム等）

②プロジェクト勉強会（各圏域）

③部分開校キックオフイベント（開校宣言、記念講演、トークセッション・交流会等）

④新設の森林ビジネスコース（広葉樹、育林）、先進課題研修（スマート林業）の先行実施

⑤研修講師や実技指導者を確保するための交流会

（林業技術総合センター）

事業構想及び令和三年度事業計画、活動状況は当センターホームページの機構サイトでご覧いただけます。

七ヶ宿町における木質バイオマス利用拡大に向けた取組

未利用材等の有効活用及び資源の地域循環を目的とし、七ヶ宿町が整備を進めていた木材チップ生産センターが完成し、指定管理を受けた地元の林業事業体で構成する七ヶ宿バイオマスチップ(株)による運営が令和三年四月から始まりました。

移動式チッパー

当該施設は、令和二年度林業・木材産業成長産業化促進対策事業により、ホイールローダー、移動式チッパー、チップ運搬用トラックを導入したものです。また、町内から新たに雇用された二名(二〇代、五〇代)は、チッパー機のジョブトレーニングを経て、オペレーターとして活躍しています。

今後は、森林組合が認定を受けた森林経営計画区域内において、地元の林業事業体が毎年約四〇㌶の森林を伐採し、年間約六四〇〇㎥の木材チップを生産する予定です。

木材チップは燃料用として、町内温浴施設や国道のロードヒーティングに使用されるほか、発電用としても出荷されます。

これらの取組により、地域の森林資源の循環的な利用や、新たな雇用の創出など、地域活性化が期待されます。

移動式チッパー稼働状況

(大河原地方振興事務所)

ＣＬＴ等建築物の現場技術者養成研修の実施

宮城県の森林資源の八割を占めるスギ人工林は、植林後五十年以上が経過し、本格的な利用期を迎えています。県では、この充実した資源を、これまで木材が利活用されてこなかった非住宅建築物への利用に繋げるため、新たな建材であるＣＬＴの製品開発と普及を推進しています。

ＣＬＴとは、ひき板を繊維方向が互い違いになるように配置して圧着した木質パネルで、現代建築に欠かせないコンクリートパネルと同等もしくはそれ以上の強度や耐火性能を持ち、中高層建築物の木造化の実現を期待できる建材です。また、単位製品あたりの木材使用量が多いため、県産材の消費拡大が図られます。

県内でも、ＣＬＴを使用した建築物は着実に増えており、最近では大崎市鳴子総合支所や宮城県林業技術総合センターの改築工事でも使われています。

一方、非住宅建築物への活用が増える中、県内の建設業者は、ＣＬＴを使った建築物の施工経験が少ないため、現場技術者の育成が欠かせない状況となっています。

県では、宮城県ＣＬＴ等普及推進協議会と連携し、実際のＣＬＴ建築現場において施工技術に関する研修を実施し、施工・監督が可能な現場技術者を育成しています。受講者は協議会独自の技術者認定を受けることができ、平成三十年度からこれまで、県内に完成した六つの建物で「みやぎ木構造現場技術者研修」を実施し、のべ三十名の現場技術者を育成しました。

今後も協議会と連携し、現場技術者の育成に取り組んでいきますので、興味・関心のある方は協議会までお問い合わせください。

鳴子総合支所を会場とした
技術者研修会の様子

(林業振興課)

地域主導による海岸防災林維持管理体制の構築に向けて

令和三年六月三日、東松島市大曲地区の海岸防災林において、大曲まちづくり協議会・東松島市・県が共催する、第一回みやぎ海岸防災林・森林づくりイベントが開催され、地域住民を含め、総勢五十名が参加しました。

会場は東日本大震災により壊滅的な被害を受けた場所で、平成二十七年度からの復旧工事により、令和二年二月までに約十七万本の抵抗性クロマツが植栽されています。

今後は、植栽木の維持管理体制の構築が課題となるため、県では、令和二年十二月に「みやぎ海岸防災林・森林づくり管理方針」を策定し、目指すべき森林の姿や関係機関の役割について定めたほか、令和三年三月には、同方針の取組の実現に向け、県・沿岸十市町・民間団体等から構成された「みやぎ海岸防災林・森林づくり協議会」を設立したところです。

今回のイベントは、協議会設立後に初めて開催されたもので、地域住民に海岸防災林に関心を持ってもらうため、ウォーキングや海浜植物観察・植樹体験など、自然体験を主としたほか、事前に地域住民からイベントのスローガンを募集し、当日、記念標柱の披露と併せて発表しました。

スローガン『みんなで育てよう海岸に緑輝く防災林』

当日は参加者が互いに声を掛け合う姿や、自然と拍手が沸き起こるなど、参加者の一体感が感じられました。

今後とも、継続的にイベントを開催し、地域住民が海岸防災林に触れる機会を創出するとともに、関係者間の水平連携の深化を図っていきます。

記念標柱と一緒に記念撮影

（東部地方振興事務所）

NPO団体との連携による松林再生への取組

令和三年六月二十二日に気仙沼市唐桑町において「NPO法人きずなの輪」と協力して松林の下刈り作業を行いました。

作業箇所の御崎、巨釜・半造地区は、複雑なリアス式海岸と松林で構成された景観を持つ、この地域を代表する景勝地となっています。

東日本大震災の前までは、松くい虫被害の防止対策を継続的に講じたことにより、被害が軽減され、景観も維持されてきましたが、震災以降、十分な対策が行えない期間が生じ、被害が拡大する傾向にありました。

そのような中、平成二十九年五月、東北復興支援に取り組む「NPO法人きずなの輪」から、松林の再生に向けて、抵抗性クロマツの植栽活動を行いたい旨の申し出がありました。

同団体の本部は関西にあり、植栽作業時には本部構成員の応援やボランティアを募り作業を行うことができましたが、昨今の新型コロナウイルス感染症の影響で、今回は保育作業の人員を十分に確保することが困難となったため、当事務所職員も協力し、実施したところです。

現地では植栽したクロマツが順調に生長していることが確認でき、さらに、実生の個体の生育も見られるなど、松林の再生が着実に進んでいました。

当該地域は、ハマギクやニッコウキスゲの自生地でもあり、松林と海岸植物との共存した豊かで特色ある海岸林の再生が期待されることから、今後も松林管理への支援を行うとともに松くい虫防除対策の徹底に努めてまいります。

上：集合写真
下：作業準備

クロマツの健全な成長を促す下刈り作業

（気仙沼地方振興事務所）

ＪＧＡＰ認証による なめこ栽培

県内のなめこ生産では初めてＪＧＡＰ認証を取得した「有限会社栗駒なめこ」の取組を紹介します。

当社は栗駒松倉地区において昭和五十年に後藤前社長が創業して以来、四十年以上にわたり地域の方々と共になめこ栽培事業を継続され、現在では年間約一八〇トンの菌床なめこを県内外に出荷しています。これまで、まれに発生する異物混入対策に頭を悩ませていたとのことですが、その解決手段として、食品安全意識や適切な農場運営及び労働安全など、総合的に取り組むことができるＧＡＰ認証の取得を目指してきたところです。

当事務所では、令和元年度に国の農業生産工程管理推進事業交付金を活用しながら、指導員資格を有する職員を中心に、リスク評価や書類管理方法などの支援を行ってきました。令和二年三月に認証審査を受検した結果、同年四月に認証登録され、現社長である御子息夫妻の熱心な取組が実を結び大きな喜びとなったところです。

認証後は、トレーサビリティを記録する日々の作業日誌や各工程のにおけるチェックリストの管理などが大変でしたが、様式を記録しやすい形に工夫するなど、幅広い年齢層の従業員が管理を行える体制を整え、社内一丸となり、安全安心な「なめこづくり」に取り組んでおられます。また、令和三年三月には初めての維持審査を受け、無事一年目の認証維持が承認されたところです。

今後は認証取得を消費者などにアピールするとともに、日々の生産管理を徹底することで、これまで以上に、おいしくて安全な、なめこ生産を目指しています。

ＪＧＡＰ審査員による
初回審査（施設確認）の状況

（北部地方振興事務所
栗原地域事務所）

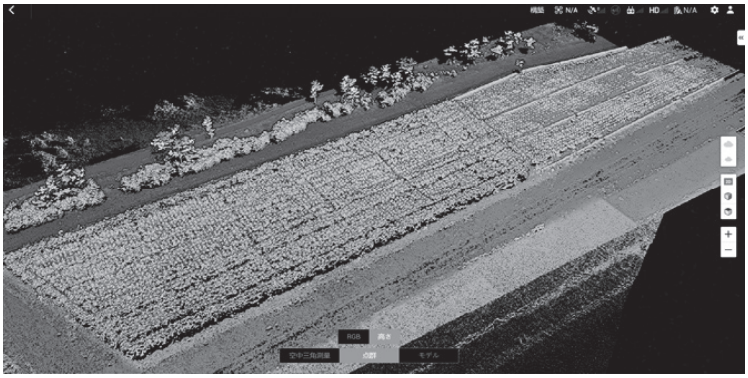
海岸防災林のドローンを用いた生育調査と保育管理がスタート

東日本大震災の津波により甚大な被害を受けた、仙台市から山元町までの海岸防災林は民有林を含め、林野庁が直轄事業で復旧整備を行い、昨年度、植栽までの復旧工事が完了し、今年度から、県（当事務所）が、民有林部分約六五〇㌶の保育管理を行っていくことになりました。

広大な海岸防災林を今後県が下刈りや除伐等の保育管理を行うにあたっては、適切な保育計画を策定する必要があります。

このため、県では正確かつ効率的に生育状況を把握することを目的に、県スマート林業推進構想に基づく取組として、ドローンによる写真測量を実施しています。あらかじめ作成した飛行計画をドローンにプログラミングすることで、自動かつ短時間で測量を行うことが可能です。また、測量データを用いて、オルソ画像を作成することにより、下刈り等の必要性を判別できるほか、作成した３Ｄ点群データをＧＩＳソフトで解析することで、面積や立木本数、樹高等をパソコン上で簡単に把握することが可能です。

これらの調査成果については、県の保育計画のバックデータとするほか、今後、関係機関・団体等と共有することで、関係者と連携した適切な保育管理に活かしてまいります。



３Ｄ点群データを標高毎に色分けしたもの
（岩沼市内の海岸防災林にて）

（森林整備課
仙台地方振興事務所）

令和三年度春の叙勲
～林業振興の功績が実を結ぶ～

今年の春の叙勲において、各分野で顕著な功績のあった方々へ旭日章及び瑞宝章が授与されましたが、県内の森林・林業分野では、加美町の猪股榮幸氏が旭日単光章を受賞されました。

叙勲旭日単光章を手にする猪股榮幸さん（加美町）

猪股氏は、昭和六十三年に加美郡森林組合の理事に就任して以来、平成九年からは組合長として大崎地域四組合の合併実現に御尽力され、その後、大崎森林組合では、代表理事組合長として森林整備事業等に積極的に取り組み、地域林業の発展に大きく貢献されました。

この度、叙勲の栄誉を受けられた猪股氏に敬意を表し、喜びの声とともに、永年の御苦労についてお話しを伺いました。

猪股氏が組合長に就任した平成九年当時は、平成の大不況で材価の低迷や林業従事者の高齢化等もあり森林整備が停滞し、森林組合の経営も大変厳しい状況だったとのことです。しかし、そうした厳しい状況下であっても、持ち前の責任感と温厚な人柄から、関係者らの協力を得て森林の造成から木材の安定供給まで、地域林業の中核的な役割を担い、森林組合の経営基盤の強化に取り組んでこられたとのことです。

「受章は身に余る栄誉であり、森林組合連合会をはじめ県内の森林・林業業界の皆様及び地元森林組合の皆様方の温かい御支援があったからこそです。」と謙虚なお言葉が印象的でした。今後は、家業である農林業を営みながら、一〇〇㌶を超える森林も経営計画に基づき管理していきたいと、役職を退いた現在も森林整備に意欲的でした。また、後進への指導など、地域農林業者の範として、御経験を活かしながら、これからも一層の御活躍が期待されるところです。

（北部地方振興事務所）

企業等による森づくりパネル展開催

森林は、木材などの林産物の供給のみならず、水源かん養や土砂災害防止、地球温暖化の防止、生物多様性保全などの多面的機能を有し、私たちの暮らしを支えています。

近年、CSR活動（企業の社会貢献活動）の一環として、森林整備活動に取り組む企業や団体が増えていることから、県では、企業等による森づくり活動を推進するため、「みやぎの里山林協働再生支援事業」、「わたしたちの森づくり事業」及び「みやぎ海岸林再生みんなの森林づくり活動」を展開し、取組を支援しています。

平成十八年度からスタートした企業等による森づくり活動の実績は、延べ一〇〇件を超え、大きな広がりをみせています。社員ご家族、顧客の皆さんや地域との交流の機会にもなるなど、地域活性化にも貢献しています。

この度、企業等による森づくりの輪がますます広がるよう、それぞれの企業等が創意工夫を凝らした森づくりの様子を紹介する「パネル展」を開催したところです。

【開催場所】
県庁一階ロビー壁面（東西）

【開催期間】
五月二十四日（月）～五月二十八日（金）

今後とも、参画する企業・団体等を募集するとともに、参加しやすいフォローアップ体制を整え、活動を支援してまいります。

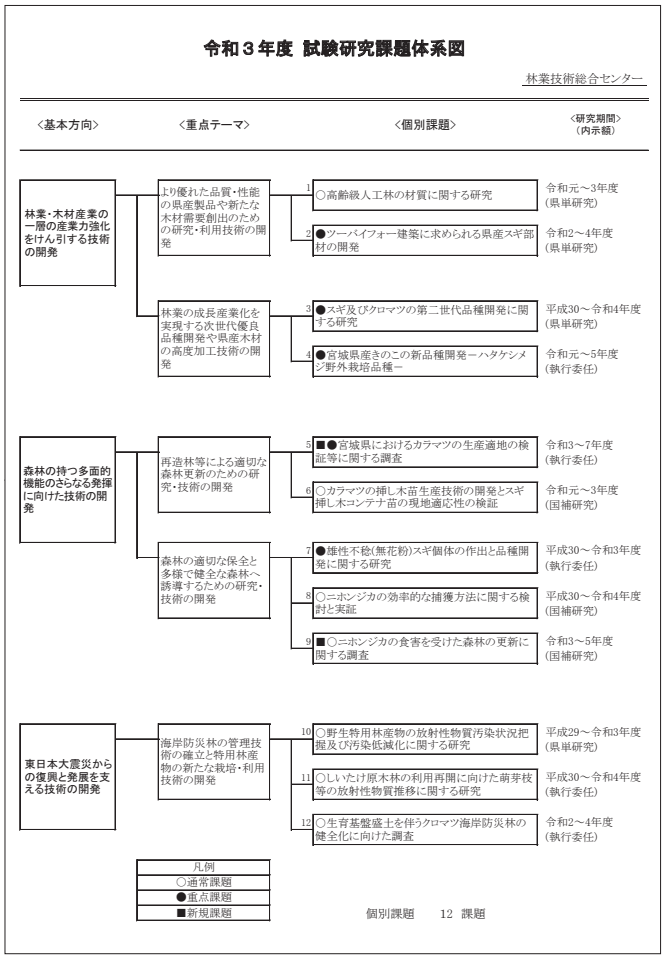
森づくりパネル展（県庁一階ロビー壁面）

（自然保護課　みどり保全班）
（森林整備課　県有林班・治山班・保安林班）

令和三年度 林業試験研究の概要

林業技術総合センターでは、「宮城県林業試験研究・技術開発戦略（二〇一九～二〇二八）」において、戦略の基本方向として「林業・木材産業の一層の産業力強化をけん引する技術の開発」及び「森林の持つ多面的機能のさらなる発揮に向けた技術の開発」、「東日本大震災からの復興と発展を支える技術の開発」と定め、重点テーマに基づき実効性のある試験研究に取り組んでいます。

令和三年度においては、重点課題として位置付けている「ツーバイフォー建築に求められる県産スギ部材の開発」や「宮城県産きのこの新品種開発―ハタケシメジ野外栽培品種―」に優先的に取り組むほか、東日本大震災の復興対策として、野生特用林産物の放射性物質汚染低減化に関する研究やしいたけ原木林利用再開に関する研究、海岸防災林の維持管理に関する研究に継続的に取り組んでいきます。

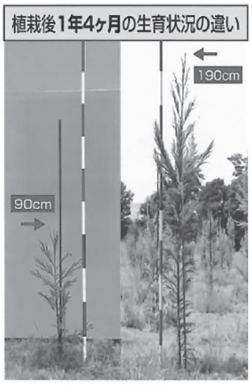


今回はこのうち林業用種苗関係の研究課題について、その概要を紹介します。

■スギ及びクロマツの第二世代品種開発に関する研究

これまでに開発したスギ精英樹よりも初期成長や材積、材質、通直性等の特性に優れた第二世代個体の中で雄花着花量も少ない特定母樹（エリートツリー）の開発を進めています。また、従来のマツノザイセンチュウ抵抗性品種と比べ、より抵抗性が優れた新たなクロマツ品種の開発に取り組んでいます。

■カラマツの挿し木苗生産技術の開発とスギ挿し木コンテナ苗の現地適応性の検証



林木育種センター提供

県内のカラマツ苗の生産拡大の要望を受け、カラマツ挿し木苗増産技術の開発に向け、発根済苗となるまでの好適な環境条件の解明を進めています。また、スギ挿し木コンテナ苗の植栽地における活着状況や成長率の調査・検証に取り組んでいます。

カラマツ挿し穂の挿し付け

■雄性不稔（無花粉）スギ個体の作出と品種開発に関する研究

森林総合研究所林木育種センターが開発した無花粉スギ品種「爽春」と県内から選抜した精英樹との人工交配を進め、本県由来の雄性不稔（無花粉）スギ品種を開発します。

無花粉品種（爽春）と袋内で人工交配させる作業

（林業技術総合センター）

木材市況の動向

表１　各共販所別木材市況（令和３年６月）

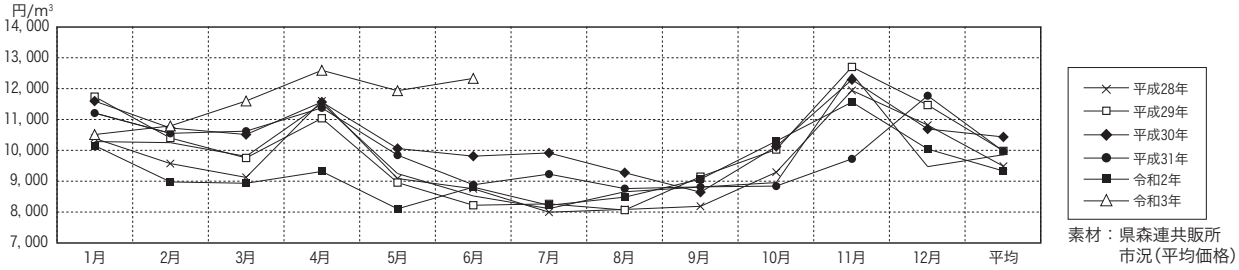
樹種	材長 m	径級 cm	価格（中値　単位：円／㎥） 仙南	仙北	大衡	津山	石巻
スギ	3.00	14～16	—	—	—	—	—
		16～30	—	—	—	—	—
		20～30	11,520	—	11,520	11,520	—
	4.00	10～13直曲	7,200	12,600	12,600	12,600	—
		14～18	9,000	12,600	12,600	12,600	—
		20～28	11,520	12,240	12,600	12,600	—
		30上	11,520	12,600	11,880	12,600	—
	3.65～4.00	20～28	—	—	—	—	—
		30上	—	—	—	—	—
	1.95	18上	—	—	—	—	—

資料：宮城県森林組合連合会

概　況

素材動向

・素材価格は上昇の傾向にある。



素材：県森連共販所市況（平均価格）

図１　素材価格の動き

特産市況の動向

表２　生しいたけ価格の市況　単位：円／kg

年　次	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平成28年	1,037	1,025	972	946	965	955	961	977	1,018	1,014	998	1,054
平成29年	1,034	945	861	862	890	775	863	851	884	980	971	1,034
平成30年	1,160	958	947	795	958	851	836	913	987	968	929	1,009
平成31年	1,064	993	895	932	887	888	901	989	949	908	953	998
令和2年	999	965	977	1,006	973	958	926	944	1,057	1,044	989	1,001
令和3年	1,046	954	916	879	892							

資料：仙台中央卸売市場

概　況

・平成24年に原木しいたけ（露地）が出荷制限指示を受けたこと等に伴い，価格は大きく下落したが，全国的な品薄状況を背景に平成26年次以降は900円代と，震災前の平均価格を上回っている。

・なお，令和２年なましいたけ年平均の単価（円/kg）は前年度を上回っている。

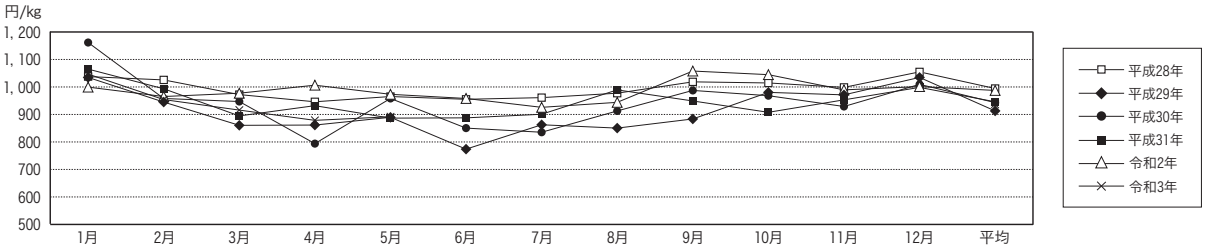


図２　生しいたけ価格の動向

表３　宮城県の新設住宅着工戸数（令和３年４月）

項　　目	総　数	木造戸数	非木造戸数	木造率（%）
令和３年４月（戸）	1,428	1,037	391	72.6
令和２年４月（戸）	1,362	973	389	71.4
前年同月比（%）	104.8	106.6	100.5	——
令和2年5月～令和3年4月（戸）	14,727	10,663	4,064	72.4
令和元年5月～令和2年4月（戸）	15,976	11,369	4,607	71.2
前年同期比（%）	92.2	93.8	88.2	——

資料：住宅着工統計

概　況

新設住宅着工戸数

・４月の新設住宅着工数及び木造率は対前年比で増加した。

・１年間の新設住宅累計及び木造住宅戸数は前年を下回っているが，木造率は上がっている。

国産材(生産販売)、木材チップ生産
製材業、伐出造林請負

宮城十條林産株式会社

代表取締役　亀山武弘

本社　〒980－0871
仙台市青葉区八幡3丁目2番7号
☎仙台(022)261－2151㈹　FAX(022)261－2150
営業所　気仙沼・栗駒・飯野川・大和・白石・郡山・岩出山
工場　気仙沼・栗駒・白石・岩出山
関連会社　宮十運輸株式会社・宮十造園土木株式会社
株式会社宮城環境保全研究所

坂元植林合資会社
株式会社サカモト
坂元植林の家

サカモトグループ

めぐる めぐみ

地域との共生
「めぐるめぐみ」をテーマに
私たちは自然を愛し、
大切に育てていきます。

〒989-1601　宮城県柴田郡柴田町船岡中央 1-9-12
Tel:0224-58-1100 Fax:0224-58-2252
www.web-sakamoto.co.jp

宮城県木材チップ協同組合

代表理事　亀山武弘
専務理事　小澤幸三
理事　亀山征弘
理事　石田竜也
監事　阿部貢
監事　一條英夫

〒980-0871　仙台市青葉区八幡三丁目2番7号
電話　022(261)2151　FAX　022(261)2150

宮城県木材チップ工業会

会長　米澤光秀
副会長　奥津文男
副会長　永井政雄
副会長　菅原正義
ほか理事一同

〒980-0871　仙台市青葉区八幡三丁目2番7号
電話　022(261)2151

緑をはぐくみ水をつくる
奥地水源地域の森林整備

水源林造成事業

宮城県水源林造林協議会

〒980-0011
仙台市青葉区上杉2丁目4－46
宮城県森林組合会館内
TEL (022) 266－7121

一般財団法人 佐々君治山報恩会

代表理事　遊佐勘左衛門

〒989-6165　大崎市古川十日町４番14号
TEL (0229) 22-1281
FAX (0229) 22-1281
E-mail: sasakimi@proof.ocn.ne.jp

☑ 製材機械
☑ プレカット機械　「木」に関連する機械の販売及びメンテナンス
☑ 農林業機械

筒井鋼機株式会社

(022)224-1261
(022)265-9231

〒980-0013
仙台市青葉区花京院二丁目２番２２号

弊社WEB

森林は大切な資源です
森林整備を通して
美しい森林を未来に伝えます

一般社団法人 **宮城県林業公社**
（森林整備法人）

〒981-0914　仙台市青葉区堤通雨宮町4－17
TEL（022）275-9171　FAX（022）275-9172
http://www.miyagi-rinkou.sakura.ne.jp

住んで良し！ 建てて満足！
「優良みやぎ材」の家

優良みやぎ材，県産材等についてのお問合せは
みやぎ材利用センター
仙台市青葉区東照宮1－8－8
▶本部／宮城県木材協同組合 tel：022(233)2883
▶総合窓口／宮城木材文化ホール tel：022(239)2661

スゴいぞ！ みやぎの木のチカラ

木×SDGs Wise use of wood from みやぎ！

県土の約6割を占める森林は，水源のかん養や山地災害の防止など多様な機能を担っており，その発揮が様々なSDGsの目標達成に貢献しています。また，製造時のCO2排出量が少なく，内部に炭素を蓄える「木材」を上手に利用すること（木材のワイズユース）は温暖化防止など様々なSDGsに貢献し，そこから生み出される恵みを森林の再生に還元させることで持続可能な循環を作り出すことができます。

みやぎには品質の良い木材があり，優れた加工技術があります。どうぞ「住んで良し！建てて満足！木の住まい」を実感してください。私たちがお手伝いします。

宮城県木材協同組合の取組例

JAS製材品の利用拡大

公営住宅建築における
JAS材利用

外構の木質化

門扉（塀）の木質化

宮城県木材協同組合　理事長　千葉　基　tel：022(233)2883
https://miyagi-wood.jp

緑の募金にご協力をお願いします！
緑の募金
＜秋の強調月間＞9月1日～10月31日　目標額45,000,000円
「緑の募金で進めよう SDGs」～森林（もり）を守る　森林（もり）を活かす～
公益社団法人 **宮城県緑化推進委員会**
〒981-0914 仙台市青葉区堤通雨宮町4-17 宮城県仙台合同庁舎10階
TEL.022-301-7501　FAX.022-301-7502

「公益信託　農林中金森林再生基金」（農中森力（もりぢから）基金）等を通じ、森林の公益性発揮を目指した活動を積極的に支援していきます。

農林中央金庫　仙台支店

〒980-0011　仙台市青葉区上杉一丁目２番16号（ＪＡビル宮城内）　☎022（711）7531（代）

私たちは森林づくりのプロフェッショナルです。ご相談はお近くの森林組合に！

JForest 宮城県森林組合連合会

仙台市青葉区上杉2丁目4－46
TEL022-225-5991　FAX022-225-5994

■優良みやぎ材の原木は
仙南地区木材センター　0224-65-2166　　仙北地区木材センター　0229-72-1877
大衡綜合センター　022-345-2205　　津山木材センター　0225-68-3038

■樹木の枝や根の有効利用は　ウッドリサイクルセンター　022-345-6041

花粉症対策スギ挿木コンテナ苗木，海岸防災林用抵抗性クロマツ苗木をはじめ，
林業用及び森林復旧用各種苗木のご用命・ご相談承ります。

宮城県農林種苗農業協同組合

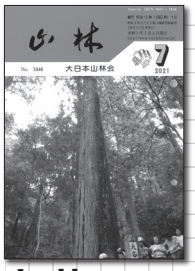
〒980－0011 仙台市青葉区上杉二丁目4番46号
TEL（022）222－3661　FAX（022）222－3688

林業の今を伝える月刊誌

令和3年度の購読申込受付開始!!

GR 現代林業
A5判　80頁
年間購読料 5,400円（送料込み）

林業新知識
B5判　24頁
年間購読料 3,000円（送料込み）



山　林
A5判　66頁
年間購読料 3,500円（送料込み）

図書の申込、問い合わせは

宮城県林業振興協会

〒981-0914 仙台市青葉区堤通雨宮町4-17
宮城県仙台合同庁舎10階

TEL 022-301-7501
FAX 022-301-7502

発行　宮城県林業振興協会　仙台市青葉区堤通雨宮町四番十七号　☎〇二二－三〇一－七五〇一
編集協力　宮城県水産林政部林業振興課